▸ 研究ノート ◂

「地域社会参加活動」の意義と課題

The Significance and Problems of “Participation in Community Activities”

室　林　孝　嗣　　本　江　理　子　　村　上　　満
MUROBAYASHI Takatsugu　HONGO Riko　MURAKAMI Mitsuru

１．はじめに

2009 年（平成 21 年）4 月、富山国際大学子ども育成学部が新設学部としてスタートした。本学部の教育目標は、「現代社会を主体的に生きるための幅広い知識と教養、子ども育成の専門家としての確かな資質能力と学びの精神をもって、地域社会の発展に貢献できる人材を育成する」ことであるが、その目標を実現する第一歩として位置づけられている授業に「地域社会参加活動」がある。この授業は、１年次の必修科目（2 単位）であり、「講義・演習」と「地域での活動」とで構成されている。

開講当時、「講義・演習」が 20 時間、「地域での活動」が 20 時間という大まかな枠は決まっていたが、具体的な内容については授業を担当する新任教員に任されていた。すべてが初めてという状況の中で、試行錯誤を繰り返しながら、学生（1 年生：63 名）とともに作り上げてきた「地域社会参加活動」を振り返る。

２．授業の目的

本学部は、「子どもの最善の利益」尊重の理念、専門的な知識・技術、豊かな人間性を併せ持ち、子ども育成の優れた実践能力を備えた人材の養成をめざしているが、具体的には以下の３つの人材像をイメージしている。

（１）子どもの生活・発達・学びの連続性をふまえて、一貫した教育指導ができる人材
（２）子どものよりよい育ちのために、家庭・地域と連携・協力し、信頼される人材
（３）地域に愛着と誇りを持ち、地域に根づいた教育・福祉・保育の実践ができる人材

また、教育課程の特色として、以下の３つを掲げている。（「　」内は授業名）

（１）子ども育成とその環境を一体的に捉える。
　「子ども育成入門」「子ども育成論」「子ども育成専門演習」
（２）効果的な実践的専門教育を推進する。
　「幼児理解」「教職実践演習」「相談援助演習」

（３）「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」ことを重視する。

「地域社会参加活動」「富山の教育・福祉・保育特別講義」「富山に学ぶインターンシップ」以上のことから、いかに本学部が子ども育成を考える上で地域を重視しているかがうかがえる。

「地域社会参加活動」は、教育課程の３つ目の特色としての「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」を実際に行うための授業であり、その目的を「富山の特色ある教育・福祉・保育の現場でボランティア活動に参加することで、地域社会とつながりをもつ社会の構成員としての自覚を持ちながら、子ども育成の現状と課題について学ぶ」とした。

３．授業の方法

講義概要では､｢地域社会参加活動について､講義及び演習を通して学習し､空き時間や放課後、休業日におけるボランティア活動を行い、活動レポートを取りまとめ、体験の振り返りを共有する」としている。 講義等の内容は以下の通りである。

＜講義等の内容＞

No	月日	講義・演習	活動等
1	4/13	オリエンテーション	
2	4/20	障害児（者）と地域について	
3	4/27	子どもと家庭・地域について	
4	5/10	活動に向けて（障害者スポーツ大会準備）	
－	5/17		障害者スポーツ大会（雨天中止）
5	5/18	地域社会参加活動の取り組み方（１）	・課題レポート ＜地域活動＞ ・活動レポート ・最終活動報告書(～12/22)
6	5/25	地域社会参加活動の取り組み方（２）	
7	7/6	プレゼンテーション、課題レポート提出	
8	7/13	演習（課題レポートに基づく）	
9	10/5	第１回活動報告会	
１０	11/2	第２回活動報告会	
１１	12/7	まとめ（演習：活動を振り返って）	
１２	1/18	最終活動報告書返却、アンケート調査	

＜地域社会参加活動の時間数＞

（１）講義・演習　＝20 時間（＝10 コマ）

（２）地域活動　　＝20 時間（＝10 コマ）

合計　　40 時間（＝20 コマ）

※１コマ＝2 時間

＜地域活動＞

・20 時間（＝10 コマ）以上

（１）一日の活動（6 時間）…一日 6 時間以上の活動。

（２）一日 6 時間未満の場合は、実時間。

※活動時間の合計が、20 時間以上になること。

※宿泊を伴う活動に参加する場合は、相談。

※移動時間は含まない。

＜地域活動の手順＞

（１）活動先を決める（活動先と連絡・調整）。

（２）「活動届」・「活動票（報告）」を記入し、事務所の①のボックスに投函。

（３）後日、②のボックスに返却された「活動票（報告）」の所在を確認し、それを持参し活動を行う。

（４）活動後、活動先の担当者に署名 or 印を記してもらう。

（５）「活動票（報告）」＋「活動の証」＋「活動レポート」をセットにして③のボックスに投函。

（６）活動の証及び活動レポートの返却（④のボックス）。

（７）各自、ファイリングする。

（８）活動をプレゼンテーションする（経過報告）（～11 月）。

（９）一年を通しての「最終活動報告書」を作成する（12 月）。

＜最終活動報告書の提出＞

（１）提出するもの

①「最終活動報告書」（A4）

②「活動レポート」

＝（活動票＋活動レポート＋活動の証）をファイリングしたもの

（２）提出先

・事務所の BOX①

（３）提出期限

・12 月 7 日（月）～12 月 22 日（火）（締め切り厳守）

＜評価＞

（１）講義・演習（20 時間）　　…30%

（２）地域活動（20 時間以上）

＊「活動レポート」の提出　　…30%

（３）「最終活動報告書」の提出（～20 前後%）

（４）その他

・課題レポート

・プレゼンテーション

※（３）～（４）は内容及び努力度を評価する。

４．授業の展開と課題

授業を進めるにあたり、以下のことが課題としてあげられた。

（１）地域をどのように捉えるか（２）授業として行うボランティア活動の意味（３）どのような活動をどのように行うのか（４）学生たちが主体的に活動できるか（５）評価をどのようにするか、である。

以上の５つの課題と向き合いながら授業を展開していった。先に示した「地域活動の手順」等はこうした課題を整理する中で考案されたものである。

（１） 地域をどのように捉えるか

学生自身、「地域」を意識する機会がこれまであまりなかったこと、また「地域」という言葉の捉え方が人によって異なることから、どこまでの範囲を地域として捉え、地域に出かけることの意味をどのように認識するのかが大きな課題であった。そこで、講義及び課題レポート・グループ討議を通して、「地域社会」を考える機会とし、「地域」を限定的に捉えることなく、その「多義性」「多重性」「重要性」について学ぶことから始めることになった。

（２） 授業として行うボランティア活動の意味

「ボランティア活動」についてもまた人によって捉え方が異なっていた。ましてやボランティア活動をすることが授業の単位となることに対し、批判的な意見を持つ学生が多かった。ボランティア活動は良いことである、しかしなぜ授業でしなければならないのか、このことに対して明確な回答は持ち合わせていなかった。こうした状況の中で、はたして学生たちはボランティア活動に取り組むことができるのであろうか。しかし、あえてボランティアについて課題レポートを出し、グループ討議等を通して、「ボランティアとは何か」について考えることにした。

（３） どのような活動をどのように行うのか

どのような活動を行うのか、どのようにして活動先を決めるか、またそのことを教員がどこまで把握するのか、それぞれの活動を教員がすべてコーディネートできるわけではない。そしてどのようにして活動を認定していくのか。

基本的には、学生自身が活動先を探し、日程調整し活動するという方法をとることにした。活動先を探す方法等を提示するとともに、「地域活動の手順」を示した。しかし、どのような活動を探し出すのか全く未知数であった。

（４） 学生たちが主体的に活動できるか

授業としての活動が、果たして学生自身の主体的な活動となるのか。もし主体的に行われない活動であるならば、学生にとってまた本学にとってもマイナスの結果しか得られないのではないかという危惧があった。

さらに、当初予定していた、「障害者スポーツ大会」（8 時間）が、あいにくと雨天中止となった。このことにより全活動（20 時間）を各自で行わなければならなくなった。学生にとってその負担感は大きく、積極的に取り組むだけのモチベーションが維持できるのかどうかが懸念された。

（５） 評価をどのようにするか

活動内容に優劣をつけることは難しい。活動時間が長ければ良いというものでもない。積極的に活動できる人とそうでない人もいる。そうしたことをどのように評価するか。

以上、多くの課題を背負いながらのスタートであった。

５．活動状況

第５回授業（2009 年５月 18 日）で、「地域社会参加活動の取り組み方」を説明した。どのような所でどのような活動をするかは、自分で判断（分からない場合は担当教員と相談）し決定することとしたが、最低限守ってほしいこととして、「活動によって謝礼等の金銭が発生しないこと」のみを条件とした。

活動状況は、活動先等多岐にわたることから、2010 年１月 18 日に実施した「地域社会参加活動についてのアンケート」（以下「アンケート調査」：資料参照）をもとに説明する。

「アンケート調査」によれば、「【1】活動を探し始めた時期」は、５月（９名）、６月（19 名）、７月（21 名）、８月（10 名）、９月（０名）、10 月（３名）、11 月（１名）である（【図-1】参照）。「【3】活動時期（実際に活動を行った時期）」が、５月（４名）、６月（６名）、７月（９名）、８月（55 名）、９月（20 名）、10 月（10 名）、11 月（10 名）、12 月（７名）（注：延べ人数）である（【図-2】参照）。活動時期は、夏休みに入った８月に集中している。早くから活動を探してはいるが、なかなか活動先が定まらなかった。あるいは活動の実施時期をあらかじめ夏休みとしていたものと考えられる。

活動先を決める際、「【2】-(1)誰と決めたか」の問いに、「友だち」（41 名）、「自分で」（31 名）、「先生（学校）」（９名）、「家族」（８名）、「知人」（２名）と答えている（【図-3】参照）。また、活動先を「【2】-(2)どのように決めたか」については、「友だち」（27 名）、「家族・知人の紹介」（27 名）、「（大学の）掲示板」（15 名）、「インターネット」（13 名）、「新聞・テレビ」（６名）、「先生」（４名）、「高校」（２名）、「前から行っていた」（２名）、「その他」（４名）であった（【図-4】参照）。

「【4】活動先は何ヶ所ですか」については、「２ヶ所」（24 名）、「１ヶ所」（23 名）、「３ヶ所」（11 名）、「４ヶ所」（５名）であった（【図-5】参照）。

「【5】どこで活動をしましたか」については、「公共施設（キャンプ場）」（19 名）、「イベント会場」（19 名）、「障がい者施設」（14 名）、「地域行事会場」（11 名）、「富山型デイサービス」（９名）、「児童館」（７名）、「障がい児施設」（６名）などが上位を占めていた（【図-6】参照）。

「【6】活動内容は何ですか」については、「スタッフ」（20 名）、「地域行事」（16 名）、「学童保育」（13 名）、「利用者の話し相手」（13 名）、「スポーツ活動」（10 名）、「福祉作業補助」（８名）、「保育補助」（８名）、「児童キャンプ」（８名）、「障がい児キャンプ」（６名）、「介助」（５名）、「地域児童活動」（４名）、「募金活動」（４名）など多岐にわたった（【図-7】参照）。

「【7】活動時間（合計」は何時間ですか」については、「20～30 時間」（29 名）、「20 時間」（15 名）、「30～40 時間」（29 名）、「40 時間以上」（７名）であった（【図-8】参照）。

「【8】活動は誰としましたか」については、友だち（49 名）、自分で（24 名）、家族（１名）であった。（【図９】参照）

「【9】(1)活動前の心境」については、「とても楽しみだった」（８名）、「楽しみだった」（20 名）、「どちらでもない」（12 名）、「嫌だった」（19 名）、「とても嫌だった」（４名）、プラス・マイナスイメージは半々であった。（【図-10】参照）。

「【9】(2)活動後の心境」については、「とても楽しかった」（31 名）、「楽しかった」（30 名）、「どちらでもない」（２名）、「嫌だった」「とても嫌だった」（０名）であった（【図-11】参照）。

「【10】地域社会参加活動をしてどうでしたか」については、「意味があった」（58 名）、「少し

意味があった」（5 名）、「どちらでもない」「意味がなかった」「全く意味がなかった」いずれも（0 名）であった（【図-12】参照）。

「【11】活動前と活動後の自分に何か変化はありましたか」については、「ボランティア観」（32 名）、「価値観」（30 名）、「子ども観」（27 名）、「地域の捉え方」（19 名）、「人生観」（18 名）、「障がい者観」（18 名）、「職業観」（17 名）であった（【図-13】参照）。

「【12】あなたにとって地域社会参加活動は、どのような意味がありましたか」については、「人とのつながり」（48 名）、「自分自身のため」（31 名）、「人生経験」（29 名）、「地域との関わり」（26 名）、「達成感」（26 名）、「気づき」（25 名）、「充実感」（21 名）、「将来の進路選択」（13 名）、「その他」（2 名）であった（【図-14】参照）。

６．最終活動報告書

「最終活動報告書」を 12 月 22 日に提出することを義務付けた。これは、先に提出した活動ごとの「活動レポート」をもとに、自分が行ったすべての活動を総括するためのものである。

「活動レポート」は、特に様式を定めず、項目のみを指定して作成する方法をとった。何故ならば、活動を振り返る際、形式に捉われることなくその活動を生き生きと自由に記述することを望んだからである。しかし、「最終活動報告書」は、これまで自分が行ってきた活動を客観的に見つめ直すことを目的としている。そこで「最終活動報告書」は様式を定め、活動自体を振り返る際の道筋を示すことにした。

項目は、「活動名」「活動日時」「活動先」「活動内容」「地域社会参加活動に取り組んで」「(1)活動前の自分」「(2)活動後の自分」「(3)自分にとっての地域社会参加活動の『意味』について（1200 字程度）」である。

（１） 活動前の自分

「アンケート調査」では、活動前の心境として、プラス・マイナスイメージは半々であったが、「最終活動報告書」では、「嫌だった」「面倒だ」「不満」「やる気が出ない」「何をすればいいのかわからない」「不安・心配」「戸惑い・悩み」「焦り・困った」等のマイナス意見が多かった。以下に例を示す。

〇私はこの地域社会参加活動のボランティア活動をすることに不満を感じていました。個人的にボランティアに参加するのは好きなのですが、強制的にボランティアをさせられることが嫌でした。強制的にさせられるボランティアは本当のボランティアではないと思っていました。

〇私は、今まで学校で企画されたボランティア活動には参加したことは何回かあったけれど、自分から取り組んだことはなかったので、ちゃんとやりきれることができるか不安だった。また経験が少ないため、無償で尚且つ時間を作って参加することで何を得られるかがはっきりと分からなかった。そのような状態の私にとって 20 時間はとても多く感じられ、達成できる自信もあまり無かった。そして、自分で活動先を選び、アポイントメントをとり、活動するという一連の流れが、初めて取り組む私にとってはとても大変だと感じていた。活動先が決まっても、活動先の方々に迷惑にならないかなど、とにかく活動前は心配や不安でいっぱいだった。

一方で、「良い機会」として捉え、さらに「自らを分析し自分と向き合う」姿勢も見られた。例

えば、「将来、自分はどんな職業に就くのか迷っている為、この機会を通して保育所や施設での仕事を体験し、自分がやりたいものを探す為、体験場所を保育所、グループホーム、老人保健施設とした」という記述である。活動を有意義にしたいという思いが伝わるものもあった。

（２） 活動後の自分

「アンケート調査」では、活動後の心境として「とても楽しかった」「楽しかった」で約 97%を占め、マイナスイメージの回答は一人もいなかった。「最終活動報告書」では、単に「楽しかった」という記述だけではなく、「戸惑い・悩み」「価値観の変容」「学び」といった内容も語られている。以下に例を示す。

○ボランティア初日から子どもたちと気まずい仲となってしまい、辛かった。ボランティア活動をして人に喜ばれることはあっても、人に嫌悪されることはないと考えていたため、ひどくショックを受けた。…（中略）…私は子どもたちとすぐにでも仲良くなれると思っていた。しかし、現実は全く違っていた。そのため沢山戸惑い、私は保育に関わる仕事に向いていないのでは、と悩んだこともあった。けれど、自分は、子どもたちの立場で考えようともしない、自分のことを第一に考える未熟者であったということを知ることができた。**（戸惑い・悩み）**

○「活動を終えた後の私は、とても心が弾んでいました。何故なら、色んなものを得ることができたからです」「活動前は、あんなに時間数のことや不安や心配でいっぱいだったけれど、活動後は、思っていたよりもあっという間に時間が過ぎたように感じたので、それだけ充実した活動ができたのだと思う」**（達成感・充実感）**

○活動後の自分の考えは活動前とはまるっきり違っていた。今はもう面倒くさいとは思わない。ボランティアを時間の無駄だと思っていた自分が恥ずかしくてしょうがないくらいである。ボランティア活動をすることで私はたくさんのことを得ることができた。…（中略）…そして授業を受けているだけでは味わえない感情、そして経験を積むことできた。たくさんのことを学び、人とつながり、自分が成長していることがはっきりとわかった。その喜びはとても大きなものだった。**（学び・喜び）**

○活動後の自分は、「強制的に参加させられた」という気持ちはなかった。強制的かどうか、というのは自分で決めることなのだと思った。自分が積極的に活動に参加すれば、それは自主的になるし、嫌いや参加すれば、それは強制的になるのだと思った。**（自主性）**

○それは障害の有無という問題ではなく、私自身が障害というものに勝手な概念を植え付けていて、「障害があるからこうしなければならない」という気持ちではじめは接していたからだと思う。…（中略）…「障害児にあったコミュニケーション」ではなく「その子とのコミュニケーション」ということだ。**（価値観の変容）**

○自分がどんな人間なのか。どんなことが得意で、どんなことが苦手なのか。また、新しい自分を発見できたり、自己理解、自己発見につながっていき、…（中略）…今は、「ボランティア活動は素晴らしい！」と、心の底から思います。**（自己発見）**

○「以前と比べて、物事一つひとつを深く考えるようになったように思う」「活動を終えて思ったことは、それらにプラスして自分自身を変える機会なのだと思いました。それは、自分がまだ体験したことのないことを経験でき、それによって新しい見方や考え方ができるのだと思ったからです」**（新しい見方・考え方）**

以上のように、活動後の自分の考え方や自分以外の人・事の見方等に変化が生じていることに学生が自分自身で驚いていることが分かる。

（３） 自分にとっての地域社会参加活動の「意味」について

「アンケート調査」では、全員が、活動をしてみて「意味があった」「少し意味があった」との回答で、「意味がなかった」と回答した学生は、一人もいない。また、変化したのは、「価値観」や「ボランティア観」「子ども観や障がい者観」といった自分のものの見方の変化を挙げる学生が多くみられた。さらに、どんな意味があったかの質問には、「人とのつながり」を挙げる学生が圧倒的に多かった。「最終活動報告書」では、それらの詳細を見ることができる。

○人と人とのつながり。それが私にとっての活動の意味だと思う。活動の中で、自分とは違う他人と出会う。活動の中で言葉を交わした時間、話さないでもともにすごした時間が普段の生活の中で生きてくる。活動の期間だけではなく、また、これから先に出会うのかもしれないという期待感、つながっているんだという思いがあふれてくる。（**人と人とのつながり**）

○「いくつになっても、大切にしていかなければならない場所」「より自分の地域に近くなれた気がした」「普段は気にすることがない地域の様子や、住んでいる人にしかわからないような話を聞くことができました」「地域に貢献できる」「地域にもっと親しみたい」「地域の方のことをもっと知りたい」「地域の活動に参加したいという思いが強くなった」（**地域の捉え方**）

○「この地域社会参加活動を通して、ボランティアとは“人のため”だと思って行うものではなく、“自分のため”に行うようなものだと思うようになりました。そしてボランティアとは相手に与えるものよりも自分が得るものの方がはるかに多いということも分かりました」「今まではボランティアをすることに意味があるという考えを持っていた。実際はボランティアをしたあとに意味があるのだ。ボランティアをしたあとに、いかに自分を振り返り今後に生かしていけるのかが大切なのだと考えるようになった」（**ボランティア観**）

○私の障がい者に対する考えを大きく変えました。活動前は障がい者に対する偏見を取り除くことは無理だろうと勝手に思い込んでいましたが、実際に関わりあうことで、障がいはその子の性格の一部分なんだと考えられるようになりました。この講義は私を変えました。（**障害者観**）

○私はボランティアを通してボランティアだけでなく他の事に挑戦する勇気を学びました。…（中略）…自分が良かれと思ってしていたことが実は周り、社会からするといい迷惑と思われることがあることを私は知ることができました。私はこの体験から自分の言動に間違いはないか考えるようになりました。（**気づき**）

○自分の欠点も含めて、自分を知ることができる人は成長していける人なのではないのでしょうか。しかし、普段の生活の中で自分と向き合う機会ということはなかなかないと思います。だから、いつもと違う地域社会という別の大きな空間だからこそ自然と自分自身と向き合うことができるきっかけが生まれるのだと思いました。（**人生観**）

○「自ら地域に働きかけ、自ら行動、アクションを起こすこと」「新しい出会いの場」「新しい自分を発見する場」「学び」「きっかけ」（**「地域社会参加活動」の意味**）

○高校を卒業し同年代の人の中にはもうすでに社会人として働く人がいる私たち大学生は子どもとして扱われることはほとんどなく、指導者、補佐としての活動が大半を占めていた。このギャップに私自身おどろきあせりがあった。（**大人としての扱い**）

○自分に今何が求められているのか考えて自分から行動する場面が多々ありました。…（中略）
…そして活動する中で私は、活動に参加される方の自主性も考慮することが大切なことではないかと思いました。**（自分と他者）**

以前の自分と今の自分との比較、さらに自分と他者・自分と地域の関係性、価値観等、様々な観点から自分の活動を振り返っている。

７．考察

「地域社会参加活動」を先に掲げた課題に沿って考察する。

（１） 地域をどのように捉えるか

地域の捉え方は、人それぞれに異なる。その人自身が地域をどのように捉えるか、それはその人自身の行動範囲であり、その人が意識する範囲である。このたびの「地域社会参加活動」での地域社会は、その活動を行う学生自身が認識する地域の範囲であった。それは、自らが活動先を探し始めた時、これまでの小・中・高等学校という限られた生活範囲から、地理的にも意識的にもその範囲は大きく広がることになった。それはある意味、未知の世界への冒険であることから、不安と期待の入り混じった取り組みになったと言える。

（２） 授業として行うボランティア活動の意味

ボランティア活動の捉え方は、さまざまであった。しかし、多くの学生が述べているように、ボランティアというのはこれまでの学校生活においては行事のようなものであったようである。つまり、学校側がお膳立てをして何か良いことをするようなものとして認識されていた。学生にとってボランティアとは、「させられるもの」という意識、それが大学生になった今もなおそのことを求められることに抵抗を感じたのではないかと推察される。

こうした意識のもとに、演習で「ボランティアについて」学生同士で話し合った。そこで、ボランティアの本来の意味するところの無償性・自発性等を学んだ。そして、そのことを意識しながら、実際に自分が行動を起こすことになるわけである。

これは、必然の流れであった。何故ボランティア活動をしなければならないのか。何故それを授業の単位とするのか。それは、そのことを苦悩した学生たちと教員とのやりとりの中で、またその活動を通して学生自身が答えを出している。それは、以下の課題で明らかになっていく。

（３） どのような活動をどのように行うのか

演習（資料参照）で「あなたにとってボランティアの意義は何ですか？」をテーマに話し合った。その後、教員は、ボランティアという言葉を使わなくなった。それは、多くの学生がボランティアという言葉から福祉的なイメージを連想していたからである。そのことにより活動範囲が狭められる。「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」ことを目的とするのであれば、幅広い分野から活動先を選んでほしいという願いが教員の側にあった。そこで、「ボランティア」という言葉ではなく、「地域活動」という言葉を使うようにした（しかし、学生は最後までボランティア活動をしたと意識しているところが興味深い）。そのことにより、活動の範囲・選択肢が拡大された。

次に、どのようにして活動先を決めるのか、またそのことを教員がどこまで把握するのか、そしてどのように活動を認定していくのかという課題であるが、基本的には、学生自身が活動先を

探し、日程調整し活動するという方法をとることにした。活動先を探す方法等を提示するとともに、「地域活動の手順」を示した。

このことにより、学生たちは、いつ・どこで・何をするかということをすべて自分で決めて行わなければならないことを認識することになった。そして、単位として認めてもらうために一連の手続きを経る必要があった。つまり、一定のルールのもとに自主的に活動する仕組みが作られたことになる。

（４） 学生たちが主体的に活動できるか

いよいよ問題は、学生たちが主体的に活動できるかである。ここが最大の課題であった。ボランティアのイメージから「させられている」「強制されて」と感じているのであれば、およそ主体的に活動が行われるとは言い難い。

しかし、「最終活動報告書」の「自分にとっての地域社会参加活動の『意味』について」にこのような記述がある。「一から活動先を探し、連絡をして許可を得て、活動先に打ち合わせに行き、日にちを話し合って初めてボランティアを開始するという流れをすべて自分で行わなければなりませんでした。これは活動開始にたどり着くまで、最初に想像していたよりはるかに大変で、自分で探して決めるというあたりが限りなく“自発的”に近い活動だったと思いました」つまり、「この活動をしよう（しなければ)」と自分で決めたときから、自発的な活動に向かっていくことになったのではなかろうか。それが「強制」であろうとなかろうと、このことで自発的な方向に向かうスイッチが入ったことになる。さらに、実際に動き出すことで、人とのつながりができ、これまでになかった経験をして、感謝され、喜び、充実し、また行きたいと思うようになるという上向きのスパイラルが発生する。もちろん苦い経験もする。しかし、この一連の過程の中で経験したすべてが、「自分の決定」によるものという思いから、すべてのことを受け入れることができるようになるとともに、自分の行動を振り返り自分なりに整理していくことが可能になっていったのではなかろうか。

このことは、時間が経過して作成した「活動レポート」で具体的になる。そして、「最終活動報告書」を書く頃には、全体を通して冷静に自分を振り返り見つめることができるようになっていた。それは相乗的にプラスの方向に作用する。始まりはどうであれ、結果として多くの学生は、この活動を主体的に行ったと言えるのではないか。これは、こちらが当初想像さえできなかった紛れもない事実である。

こうしたことから、この活動はボランティア活動をすることが本来の目的なのではなくて、「まず地域に出てみる、そして地域で何らかの活動（＝地域活動）をすることにより、そのことから何かを学ぶ。それは地域の中で営まれる活動であって地域の中だからこそ学べる『実践の学びの世界』に身を置くこと」なのである。

（５）評価をどのようにするか

①「活動レポート」と「最終活動報告書」

「活動レポート」が提出されたときには、その分量・内容等まちまちであまりにその格差が激しかったことを正直に言わねばなるまい。そこで、「最終活動報告書」では様式を定めることにした。するとその内容は、格段に整理され充実した。これは不思議な現象であった。枠があった方が整理しやすいということであろうか。いずれにしても、「活動レポート」と「最終活動報告書」

は、その人の努力度を見るのに大事な役割を果たした。

学生一人ひとりの活動を見たわけではない、また見ることもできない。すべて自己申告である。実際どのように活動したのかは、そこに居合わせた人から聞くのが良いのであろうが、それは不可能である。何をどの程度したのかという評価は私たち教員にはできないということを前提に何を評価するのか。私たちが確認できるものは、「活動レポート」と「最終活動報告書」だけである。私たちの関心は、「自分が行った活動をどのように表現し伝えることができるか、またそのことをどのように捉えそのことの意味をどのように考えたのか」である。

自分が行った活動が良かったのか悪かったのかということは、その当事者自身が感じていることである。そのことが自分にとってどういう意味があったのかを考えたとき、客観的に自分を見ることが可能になる。活動前の自分と活動後の自分を振り返り、そのことの意味するところを考える行程、そこに私たちの評価の基準を置いたのである。

②活動報告会（資料参照）

もう一つの評価をする基準に、活動報告会がある。個人の評価にはそれほど大きなウェイトは占めないが、「地域社会参加活動」の授業の中では重要な役割を担った。

7 月に、2 グループの実践報告（プレゼンテーション）をしてもらった。「ＹＭＣＡ活動」と「障害者のフライングディスク大会」である。夏休みの前に実施したことで、他の学生にはかなり刺激になったことであろうと推察される。そして、10 月と 11 月にそれぞれ活動報告会を開催した。自分（たち）がした活動を皆の前で発表することで、活動自体を整理する機会となり、また何をどのように伝えればよいのかの勉強になったことであろう。活動報告会はお互いの活動を認め合うとともに体験を共有する場となり、皆がそれぞれの活動報告を真剣に聞き入っていたのが印象的である。

８．まとめ

４月当初から、どのように授業を展開していけばよいのか試行錯誤の連続であった。ここに来てようやく何らかの成果が見え始めた。それは、「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域で育つ」ことを目的とした「地域社会参加活動」で、学生たちは「地域活動」を通して、地域を意識し、人と人とのつながり等多くの学びを得、確実に学生自身が成長していることである。特筆すべきは、昨年 10 月、学生たち自身でボランティアサークルを結成し、自主的に地域に出て活動をし始めたことである。

今、「地域社会参加活動」のことを批判的に言う学生はいない。アンケートの結果からもそれは明らかである。「地域社会参加活動」の「活動」は、ボランティア活動をすることが本来の目的なのではなくて、「まず地域に出てみる、そして地域で何らかの活動（＝地域活動）をすることにより、そのことから何かを学ぶ。それは地域の中で営まれる活動であって地域の中だからこそ学べる『実践の学びの世界』に身を置くことなのである」と、結論づけた。

この後、学生たちは、教育・福祉・保育の道を目指す。いずれも実践場面での活動が評価されそのことを問われる世界である。おそらくこの「地域活動」で実践現場の醍醐味を味わったに違いない。これは近い将来、実習に生かされるであろうし、また将来の職業選択にも、またその人

の人生をも大きく変えるきっかけとなるに違いない。そうした意味では、「地域社会参加活動」の秘められた役割は無限に広がる。このことが「地域社会参加活動」の大きな意義である。そして、このことの意味するところを「子ども育成学」に繋げていくことが今後の課題となるであろう。

参考文献

・森岡清志、地域の社会学、(2008)　有斐閣
・岡本栄一、ボランティアのすすめ、(2005)　ミネルヴァ書房

資料

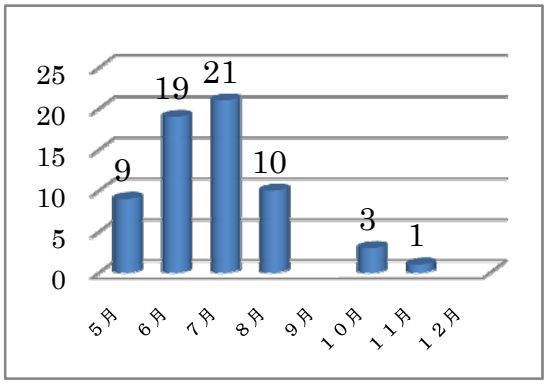
１．演習
２．活動報告会
３．アンケート調査（結果）

１．演習
＜第１回演習＞（2009.7.13）
テーマ：１．あなたにとってボランティアの意義は何ですか？
　　２．○○○にとって地域社会とは何ですか？
＜第２回演習＞（2009.12.7）
テーマ：活動を振り返って（グループ討議）
※活動を漢字で表すと？
　変、頼、一、実、杞憂、感、辛→幸、育、揺→驚、喜怒哀楽

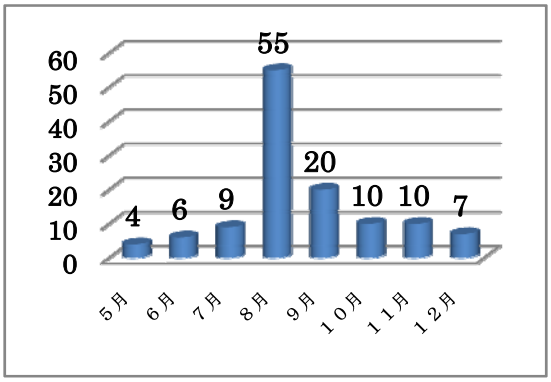
２．活動報告会
＜第１回活動報告会＞（2009.10.5）
　①一人でボランティアにチャレンジして
　②このゆびとーまれでの２日間
　③上畠アート 09
　④夏合宿☆
　⑤ゆりの木の里の納涼祭
＜第２回活動報告会＞（2009.11.2）
　①「つつじ」（通所更生施設）での体験を通して
　②学童ボランティアに参加して
　③福光児童館での催し
　④学童保育に行って
　⑤赤いふうせんでのボランティア
　⑥ふれあいキャンプ

３．アンケート調査（結果）

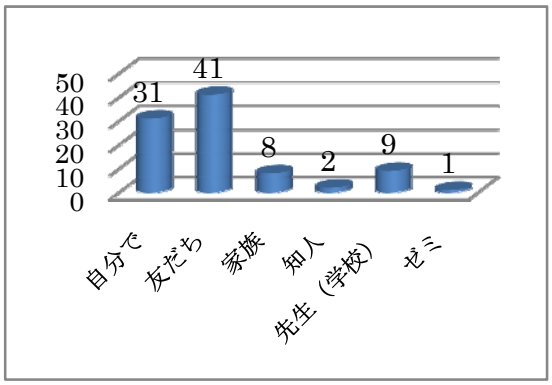
【図-1】活動を探し始めた時期



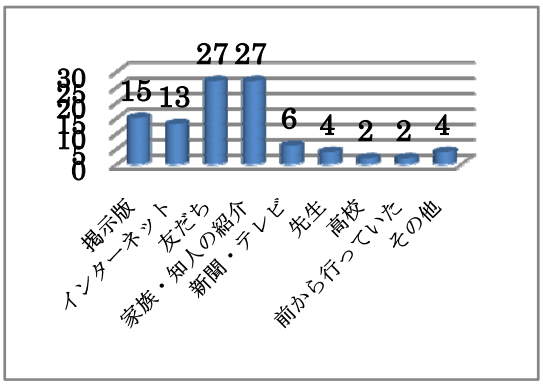
【図-2】活動時期



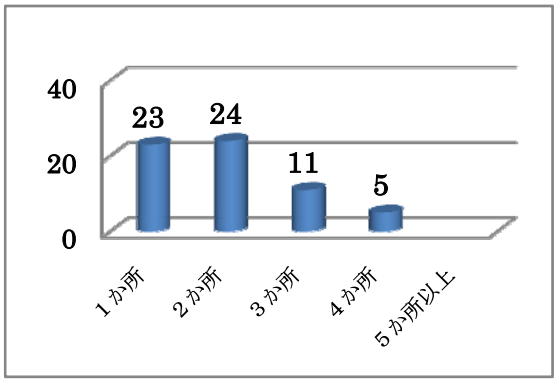
【図-3】誰と決めたか



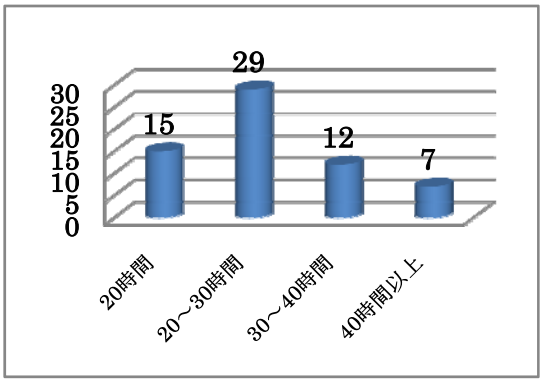
【図-4】どのように決めたか



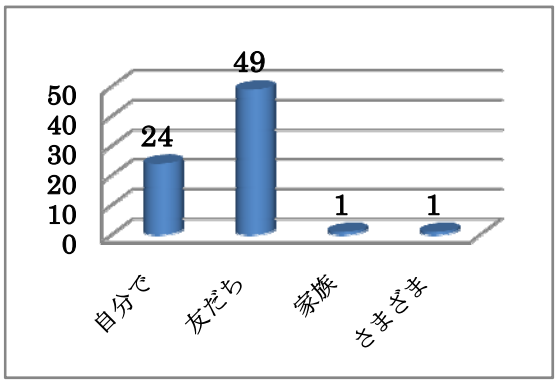
【図-5】活動先の数



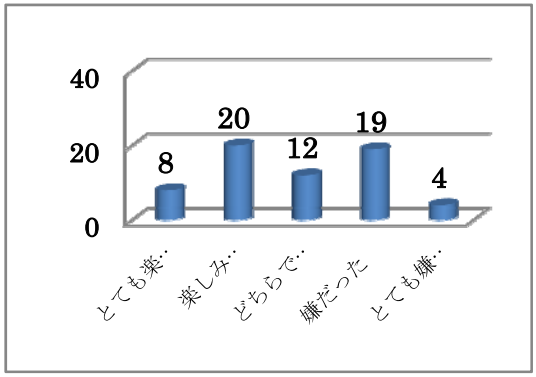
【図-8】合計活動時間



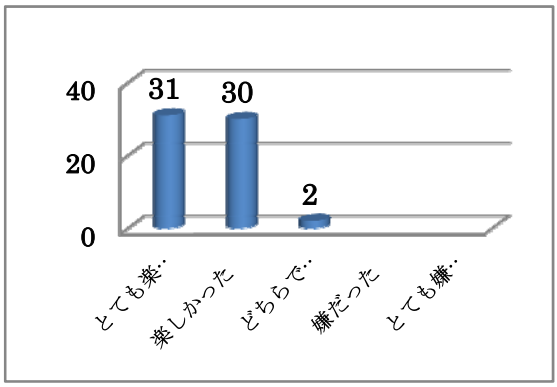
【図-9】誰と活動したか



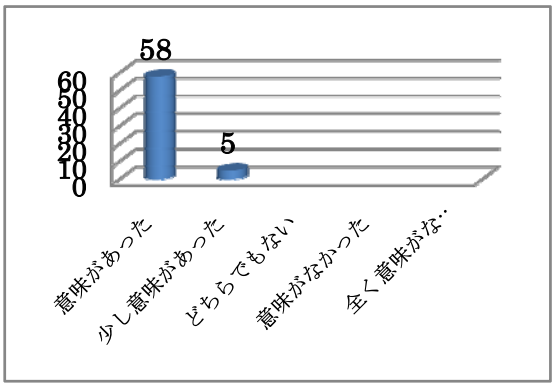
【図-10】活動前の心境



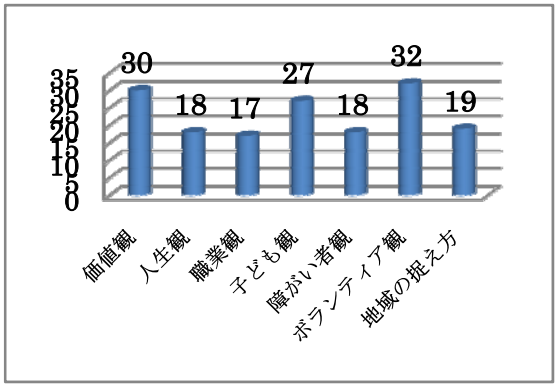
【図-11】活動後の心境



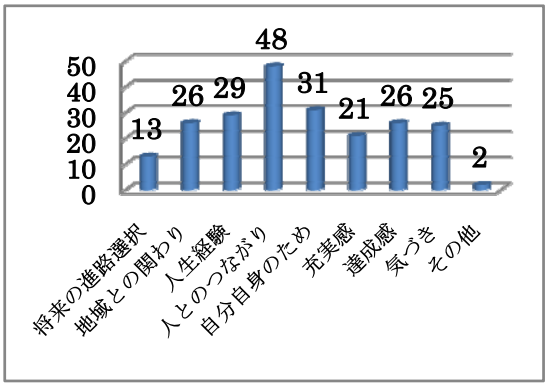
【図-12】活動をしてどうだったか



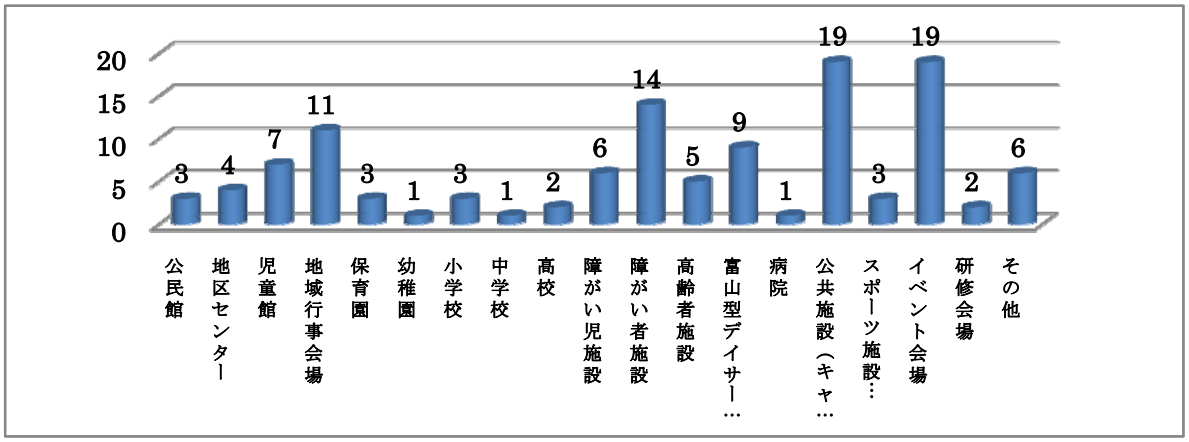
【図-13】変化があったこと



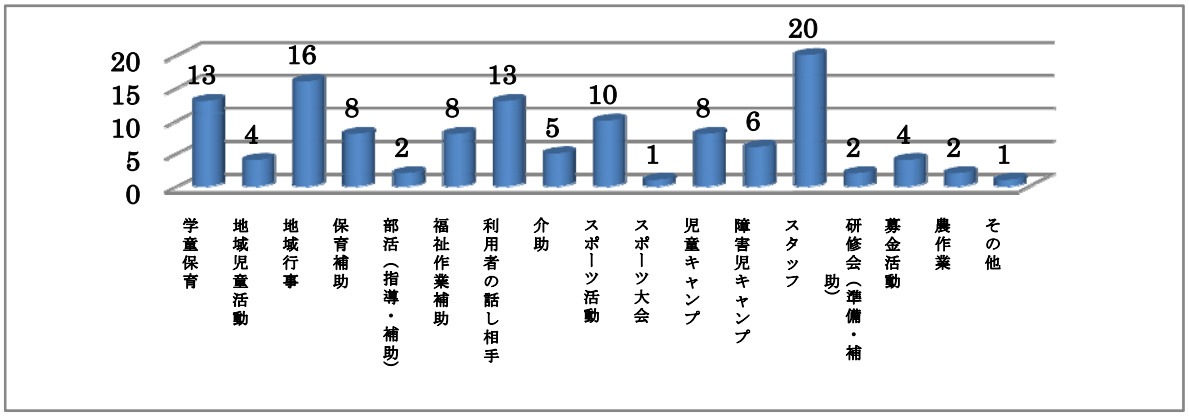
【図-14】どんな意味があったか



【図-6】どこで活動をしたか



【図-7】活動内容



地域社会参加活動についてのアンケート

2010. 1. 18

このアンケートは、来年度の授業に反映させるために行うものです。（該当するものに○をつけてください）

学籍番号＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【1】活動先を探し始めたのはいつ頃ですか
a 5月　b 6月　c 7月　d 8月　e 9月
f 10月　g 11月　h 12月

【2】活動先は、誰とどのように決めましたか
（1）誰と（複数回答可）
a 自分で　b 友だち　c 家族　d 知人　e 先生（学校）
f その他（　　）

（2）どのように（複数回答可）
a 掲示板　b インターネット　c 友だち　d 家族・知人の紹介　e 新聞・テレビ
f その他（　　）

【3】活動時期はいつですか？（複数回答可）
a 5月　b 6月　c 7月　d 8月　e 9月
f 10月　g 11月　h 12月

【4】活動先（箇所数）は何カ所ですか
a 1ヶ所　b 2ヶ所　c 3ヶ所　d 4ヶ所　e 5ヶ所以上

【5】どこで活動をしましたか（複数回答可）
a 公民館　b 地区センター　c 児童館　d 地域行事会場　e 保育園
f 幼稚園　g 小学校　h 中学校　i 高校　j 専門学校
k 特別支援学校　l 障がい児施設　m 障がい者施設　n 高齢者施設　o 富山型デイサービス
p 病院　q 公共施設（キャンプ等）　r スポーツ施設(屋内、屋外)　s イベント会場　t 研修会場
u その他（　　）

【6】活動内容は何ですか（複数回答可）
a 学童保育　b 地域児童活動　c 地域行事　d 保育補助　e 部活（指導・補助）
f 福祉作業補助　g 利用者の話し相手　h 介助　i スポーツ活動　j スポーツ大会
k 児童キャンプ　l 障がい児キャンプ　m スタッフ　n 研修会(準備・補助)　o 募金活動
p その他（　　）

【7】活動時間（合計）は何時間ですか
a 20時間　b 20～30時間　c 30～40時間　d 40時間以上

【8】活動は誰としましたか（複数回答可）
a 自分で　b 友だち　c 家族　d 知人　e その他（　　）

【9】活動前・活動後の心境についておたずねします。
（1）活動前の心境
a とても楽しみだった　b 楽しみだった　c どちらでもない　d 嫌だった　e とても嫌だった

（2）活動後の心境
a とても楽しかった　b 楽しかった　c どちらでもない　d 嫌だった　e とても嫌だった

【10】地域社会参加活動をしてどうでしたか？
a 意味があった　b 少し意味があった　c どちらでもない　d 意味がなかった　e 全く意味がなかった

【11】活動前と活動後の自分に何か変化がありましたか。（複数回答可）
a 価値観　b 人生観　c 職業観　d 子ども観　e 障がい者観
f ボランティア観　g 地域の捉え方　h その他（　　）

【12】あなたにとって地域社会参加活動は、どんな意味がありましたか？（複数回答可）
a 将来の進路選択　b 地域との関わり　c 人生経験　d 人とのつながり　e 自分自身のため
f 充実感　g 達成感　h 気づき
i その他